

した子どもらは、感謝を忘れないために「極東青年会」を設立し、日ポ友好に尽くしている。

今回の作品では、どの時点までをモチーフにしたのかは分からないが、後半場面ではハレルヤ唱が響き渡る。

日本赤十字のNEWS オンライン版 2020年2月号には“恩返し”と題し、1995年「阪神淡路大震災」

新刊紹介

『迷子の魂』 オルガ・トカルチュク(文)、ヨアンナ・コンセホ(絵)、小椋彩(訳)

岩波書店
2020.11

フィロソフィー本?

私がもし図書館司書なら、大型書店の店員なら、この本は哲学書のカテゴリーに分類するだろう。いや、アート表現のコーナーか。でも思春期のころにこそ触れてほしい。大人のための絵本コーナーも充実しているから、出来れば表紙飾りの棚が相応しいかと、あれこれ悩むだろう。

まずは表紙をご覧ください。インクの滲みボケる題字は時の流れが重なり、背表紙の擦れ具合のデザインも心憎い。

所々には、時の移りを醸し出すような、不用意に紛れこんだ手ちぎりの挟みのメモや、縁が朽ちか

けた古写真の仕掛け。数枚透明シートの読みページと、絵のみの次ページへの透視の時空間。

とびとびのスタンプページの数字が、待つことを伝え、時を急がせない、母なる製作者の慈しみが奥に潜んで早る指を留めさせるのだ。

このご本一冊に、前半はペン先で葉脈一本も略さない具象力の高い俯瞰のモノトーン。後半は次第に増える差し色と懐かしい画剤の香り立つタッチのボリューム。

素朴で漂白しない昔ながらの“帳面”の方眼紙素材は、逆に贅を尽くすアート性を高め、その全ての構成のコンテンツが、魂のあり方にベクトルを向け、ノスタルジーの翳りあるセピア調の熟成で滲み染めている。

まずはその初見で、現代の過剰世界から覚醒しながらの感動をお伝えしたいという衝動があった。

これでようやく本の内部に潜入出来る。筆者は2018年度ノーベル文学賞受賞のポーランド作家オルガ・トカルチュク、絵のヨアンナ・コンセホは出版(2017)の翌年、本書でポーニャ・ラガツィ賞優秀賞を受賞、翻訳の東洋大助教でポーランド・ロ

の被災児童 60人がポーランドに招待されたときの記事が掲載されている。まさに友好ということは手を指し伸ばすことから生まれるということであろう。

(むらた・じょう)

参照(いずれも web から)

- ・「Vol.10 ポーランド孤児救済」日本赤十字社、展示紹介コラム、2011/7/1
- ・「100年前のシベリアからの救出劇! 765人のポーランド孤児と日本人の奇跡の物語」辻明人、日本文化の入口マガジン和楽 web、2020/5/21

シア文学専門の小椋彩(ひかる)さんは、昨年北大での公開講座にて、学識を超えたトカルチュクとの交流もレポートされていたので、嬉しさも増す。

【魂が動くスピードは身体よりもずっと遅いのです。あるところに、忙しすぎて魂をなくしてしまった男がいた。男は医師の助言にしたがひ、「迷子の魂」をじっと待つことにする。すると――】

帯にはこう、あらすじが記されていて、私はすぐさまミハエル・エンデの名作「モモ」の時間どろぼうと盗まれた時間を人間に返した不思議な女の子モモを連想したが、本作は淡白なストーリーで他力を登場させない。仮想であるが現実味が色濃い。

アドバイザーは賢い老医師一人。主人公は自分の魂を置き忘れ、自分の名さえ忘れた、一昔前ならモーレツサラリーマンと言われた類いだろうか。現代なら同調時代という個の喪失・埋没の知らぬぶり傍観社会への警告とも受け取れる。

前向き、自分探し、ポジティブ、アイデンティティへの希求は、より過剰な社会の加速で逆に排他を生み出しているのかもしれない。

主人公ヤンはひたすら待つのだ。数ページの沈黙は待つことに注がれている。そして迷子の魂は時を合わせて空洞の主の前に現れる。

待つとは、留まるとは。皮肉なことに、これはコロナウイルス蔓延で余儀なくされた私達自身の暮らしでもある。トカルチュクは予言者でもあったらしい。

自分とは、果てしない旅をしてきた DNA の産物である。この恵みを魂の有り様と重ねれば、もう感謝しかないはずなのに、私達は足りないものをまだ追いかけていた。

そろそろ気づいて良いはずである。

魂と歩調を合わせよう。

自分を訪ね、自分に還る、魂そのものを迎える。

現象に一々反応して焦り、悪者を探すのはよそう。魂は迷子となっても、必ずや主の元に着く。

自分を見失うとはよく言ったものだ。



待てば良いのだ。
まるで、おばあちゃんから受け継いだかのような

装幀に再び五感を震わせる。
ありがとう! トカルチュクさん (熊谷 敬子)

『樺太における日ソ戦争の終結～知取協定』 ニコライ・ヴィシネフスキー(著)、小山内道子(訳)、白木沢旭見(解説)

御茶の水書房
2020.8

隠蔽された停戦協定

樺太の戦前・戦後を多少なりとも知る者として、本書には大きな関心をもって目を通した。

特に、当時樺太ではソ連は敵国でなかったし、ソ連の宣戦布告は驚きをもって見られたことを思い起こす。まず、ソ連軍は日本が無条件降伏を受け入れた後も樺太の各地へ侵攻を続け、さらに8月22日の現地第88師団とソ連軍の停戦協定(知取協定)締結後も、空爆を続けたことは不可解であった。島民の掲げる白旗も赤旗も完全に無視された。

当時、日ソ間には「日ソ中立条約(不可侵条約とも)」が締結されていたが、1946年以降は不延長とする通告はあったものの、基本条約は期限内であるにもかかわらず反故にされた。

本書では、それらについて日ソの見解の相違が明らかになることを期待したが、上記の条約や協定書を反故にした経緯は全く触れられていない。当時のソ連の考え方は日本側には到底受け入れられないが、いかにもソ連=ロシア側のロジックである。

この件に関する日本側の記録としては、停戦協定の責任者であった第88師団の鈴木康生参謀長がその記録を戦後42年目に自著に残している。そこにはこの協定について日ソ間の締結書類が残されていることが克明に記録されている。しかし、この文書は日本側にはあるが、ソ連側の公文書には残されていないことが明らかになっただけだった。つまり知取協定はソ連側に無視されていたのである。

ハーグ陸戦条約などの国際法に照らしても、この協定破りは認められないものだ。停戦協定の存在が解明されれば、樺太も、北方四島もロシアが不法に強奪したことが明らかになり、陸戦条約の精神にも悖るものだろう。

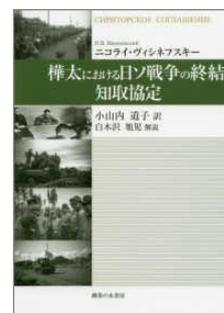
本書の著者、サハリンの郷土史家ニコライ・ヴィシネフスキー氏は日本側の資料をみて、ロシア側の公文書に知取協定は残されていないことを、ロシア人として初めて明らかにした。これは日本側にとって大きな意味があるが、果たして今後ロシア側で検証されるのか、見通しは不透明である。

ロシア政府は現在に至るも「これらの領有は先の大戦の結果だ、その事実を日本は認めよ」と強固に主張しているが、樺太での日ソ戦は、多くは日本

の無条件降伏後であり、また、この知取協定の締結後の一方的な攻撃の結果である。ソ連はこれらの不都合を隠蔽するために終戦は9月2日としているが、詭弁に過ぎないだろう。ソ連は少なくとも連合国側であり同一歩調をとるべきだった。また領土確定のサンフランシスコ条約にも出席しながら調印はしていないのだ。

ロシアが大戦の結果だと胸を張るのであれば、日本はロシアに対して、将来にわたって同じ論法でそっくりお返しできるというワイルドカードを握ったことになる。そういう意味で、本書は日本にとって大きな意義のある一文となろう。

また、二国間条約や協定など何時でも一方的に反故にできるということも教えてくれた。樺太は多くの島民の犠牲の上で本土防衛のための捨て石となったが、ソ連=ロシアという国の本当の姿を教えてくれたことは唯一の収穫であった。



樺太残留ポーランド人の運命

ソ連軍の侵攻の陰で、日本人島民の悲劇ばかり語られることが多いが、苦しんだのは決して日本人島民たちばかりではなく、ロシアや他の国々から残留や亡命していた人々のことも思い起こされる。戦前は、日本の官憲により彼らはひと括りにソ連のスパイと目をつけられたこともあった。

中でもサハリン島時代から「ワルシャワ村」と呼ばれた集落を作り、いつの日か母国へ帰る夢を抱いていたポーランド人たちがいた。彼らは1925年までにスタニスワフ・パテク初代駐日ポーランド特命全権公使から直接母国のパスポートを交付されたのであるが、戦間期から第二次世界大戦期の複雑な情勢から、帰国する機会を失っていた。彼らは日露戦争で日本軍により解放され残留希望を認められたのだが、四十年後に今度はあの悪夢のソ連に解放されるという数奇な運命をたどったのである。

ソ連軍が侵攻してきた時、彼らはソ連軍や民生局の通訳として徴用され、日本人のために働いた者もいた。それは樺太波蘭人会会長のアダム・ムロチコフスキ(ウッチ出身の教育者、北サハリンからの亡

な技法(伝統的なネーデルランドの対位法からマドリガーレまで)に加えて民族的なポーランド舞踊のリズムが駆使され、簡素で無駄のない150余の小品に束ねられています。

宗教的寛容の証しとして

まさに珠玉と言える、美しい作品の数々は「素朴な民衆のために」書かれ、カトリック司教に献呈され

ながらも、賛辞は改革派活動家が寄せるという、当時としては稀有な宗教的寛容の証しでもあります。

この度ハンナ社より、ポーランド声楽曲選集の第6巻として、このうちの37曲が出版されました。多くの方々が、この美しい作品を知り、味わってくださることを願ってやみません。(黄木千寿子、音楽学、愛知県立芸術大学ほか非常勤講師)

『迷子の魂』 オルガ・トカルチュク(文)、ヨアンナ・コンセホ(絵)、小椋彩(訳)

岩波書店
2020.11

2019年、ポーランドで五人目のノーベル賞を受賞(2018年には『逃亡派』2007で国際ブッカー賞を受賞)したオルガ・トカルチュクが、その前年の2017年に初めて「絵本」にテキストを提供した、この『迷子の魂』は、ヨアンナ・コンセホの詩的“絵画”(絵本の領域をはるかに超えた、美術絵画のカテゴリーに組み入れるもの。銅版画(エッチング)と疑う陰画と、華やかな油彩の陽画との鮮やかな対比!)を得て、私のかつて知らない、他に類を探し得ない巧緻、精緻な絵本に仕上がっている。(海外の絵本では、独自繊細なモノクローム線画と強弱の韻を踏んだ文章—その全てが柴田元幸訳—のエドワード・ゴッリーへの傾注私は未だやまずにいるが、そのテイストを全く異にする。)

白水社の『逃亡派』読後で、トカルチュクがワルシャワ大学で心理学を専攻、卒業後セラピストを経ていることを既に知っていて、『迷子の魂』からエッセンスとして浮かびだしたのは「ユング」だった。ユング自伝の中の熾烈な言葉「人間にとって決定的な問いとは、自分が限らないものとつながっているかどうかということである」を鮮明に想起した。

あるところに忙しいビジネスマンがいた。(それはとりもなおさず直進する文明社会を黙々と生き継いでいる私達だ。一人のヤンは千人の私達だ。)ある夜、出張先のホテルで夜中に目覚めて異常に気付く。息が出来ない、自分の中にもはや誰もいない、名前すら憶い出せない。翌くる日、賢い女性医師を訪ね、次のように告げられる。「忙しく走り回る人で世界はあふれ返っている。彼等の魂は背後に置き去りにされて迷子になっている。」医師はヤンに告げる。「魂が動くスピードは、身体よりもずっと遅い。あなたは静かに落ち着ける場所を見つけて、そこでじっくり自分の魂を待ちなさい。」

ヤンは医師の治療法に従順に従ってその街の田園の小さなコテージにとどまり、迷子にした魂の

やってくるのを、どこへも行かず何もしないで、幾日も幾週も幾年も待つ。幼い頃の光り輝いていた時代(陽の色のコートを着た少女がいつも彼に寄り添っている)の画がコテージの男の絵と等分に、絶えず私達に保たれる。思い出はセピア色の写真にまで添えられる。

待ち続ける物語は、誰しもが反射的にベケットの『ゴドーを待ちながら』1952 を思う。ゴドーは一体誰だったのか。神だと言い、救済者だと言い、そしてその不条理劇に私達は心酔した。あれは人間が存在しているのはどういうことか、と考えさせる実存主義哲学の出発点だった。

『迷子の魂』では、トカルチュクは悲惨な 寓話には終らせない。魂は、ある午後、美しい少女となってヤンの窓辺に、疲れて汚れて傷だらけで“やっとな!”と言って帰ってくるのだ。表紙の椅子には、解離性障害を予兆させるヤンの上着(ジャケット)が絶望としてかかり(椅子の足元には忙しい移動の暗示として重要な意味をもつトランクが置かれ…)、陽転の日々の安堵の椅子(同一)には少女(魂)のオレンジのコートが 希望 としてかけられている。

コンセホの絵には到る処、美しい仕掛け(ギミック)が横溢している。詩と思想が濃く潜んでいる(『迷子の魂』は2018年に栄誉あるボローニャ・ラガッツィ賞を受賞)。ヤンが魂を失っている時のモノクロページは無機質な冬の絵で、やがて植物や動物に囲まれる(自然回帰…)色彩豊かな世界へ。そしてさらに濃密な光と彩りで生の歓喜へ。

最終章でヤンはトランクと時計を庭に埋める。ヤンとその初々しい魂は相携えて、これからアンダンテ・モデラートといった足どりでゆっくりと原郷への道を歩み出すのだろう。

去年春からこうしてコロナ禍にあって、世界で移動が制限され、此処に留まることを余儀なくされた今、私達はもう一度「魂」と出逢わなければならない。

人類必至の道程。私達はもう魂を迷子にはさせない。(長屋 のり子、詩人、本会会員)

